

毎日歌壇

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

灯台の時代におもいがとどまったままぜんぶ
が消えてまた灯る日々 横浜市 大原 香花

△評▽灯台の時代とは遠く未来を照らす希
望の日々だろう。全部が消えたというのは
悲痛であるが、また希望を見いだしたのだ。

喫茶店クリームソーダがあそこにもここにも
潜んでいる長い夜 岐阜市 山上 秋恵

△評▽深夜の喫茶店だ。人の姿が見えない。
夢のようでクリームソーダだけが潜む。

何度目の夏の終わりの海街の空気の底のアイスキャ
ンデー まだ眩しい 宮古島市 塩見 伴

海だった。スクリーン越しのすべてがね レイトシ
ヨーには僕だけがいた 所沢市 里見 脩一

くもりでもあかるい土曜 朝だからこれから歩
いてどこでも行ける 名古屋市長 森本 有

記憶の冷却管を駆けてゆく晩夏ランナーのよ
うに走る痛みだ 平塚市 芝澤 樹

寂しくて指の先まで寂しくて食るように数
えるお札 広島市 堀 眞希

その先の森を過ぎればふかい秋 待ちわびて
いるゆきひとひらを 兵庫 廣澤 真希

(これは夢) いない子どもの手を繋ぐ、波が
引いたり潮が満ちたり 福岡市 横井マリノ

座礁した宝船から絶え間なく漏れ出している
鳥の記憶が 名古屋市長 朝田おきる

あきらめは火の貌をしてピエタ像の左手に沿
うかすかな光 加古川市 石村 まい

△評▽ピエタの左手にそんな光があっただ
ろうか。決してあきらめない神の母、人類
の母に。

階という区切りどこにも無いままに螺旋階段
空へと向かう 倉敷市 中路 修平

△評▽らせんという思想の源はどこだろ
う。遺伝子か。

ゆふぐれから逃げ遅れたるわたくしは一篇の
時に組み込まれたり 見附市 有村 桔梗

朝日から逃れられない窓際で眼に秋の光を
見せる 東京 高嶋 彩香

完全に陽は落ちたのだ星の数一つ二つと数え
られるほど 札幌市 橋 晃弘

浄化槽につと曼珠沙華咲いており火葬の如く
揺れてささめく 神戸市 入間しゅか

凹凸の無限にありし果物の皮を剥くとは罪を
暴くこと 町田市 古井 朔

彼岸花を擦りつけると青が増すことがあるよ
ね秋口の虹 枚方市 久保 哲也

群れをなし秋空高く鯨雲家々の屋根に魚影
きらめく 加古川市 畑 啓之

流星にはじめて願ひをかけた日のいのちよ夢
は叶いましたか 小平市 十海こいろ

「幸せになれば」に鎖き階段を二段おりては
友に手を振る 川崎市 奥村 真帆

△評▽友人に何かの相談をした後の場面だ
ろうか。「階段を二段おりては」の手の振
りに作者の感謝と喜びが表現されている。

百メートル先を見つめて静けさのなか白線に
ネイルが並ぶ 宮崎 門田 藍子

△評▽先日の世界陸上の歌。鮮やかな歌い
方で、特にネイルに着目したのが見事。

線状降水帯予報出る日も七割が来る老人のラ
ジオ体操 さいたま市 長谷川文彦

見上げてる人の数だけ月がありどちらの国の
兵士も照らす 宇治市 濱岡 学

「救わない世界」の内に吾もいてガザに広が
る飢餓を見ている 神戸市 小林 照明

宇品まで汗と涙の歌碑探訪また口ずさむ明治
の「港」 伊賀市 福沢 義男

△祈り▽とは信じ切ること幼子の指の尖塔ま
っすに立つ 東京 稲山 博司

老いし妻なんだかんだと忙しい「妻がほしい」
と妻がのたまふ 大阪市 吉田 昌之

基礎問題はかりを解いていたからか応用きか
ぬ大人となれり 金沢市 竹内 一二

虫の音のにぎやかで窓閉める夜リリリと部屋
で一匹の声 仙台市 五十嵐 舞

渚からあなたの椅子まで遠かりき足裏に夏
のほてりが痛し 北九州市 松尾あけみ

△評▽ある夏の海辺の思い出だろうか。上
句の入り方が映画のようなアングルでロ
マンチック。それがかえって新鮮だ。

かごめかごめ声も響きもくるとわれどー
ナツの空洞に居る 津島市 秋和 明

△評▽「かごめかごめ」の少し不安な歌詞。
輪の中にいる感覚をユニークに捉えた。

パイプ銼え見栄切る案山子パイプには交互に
休むアキアカネたち 埼玉 新井 清

こんなにもここにこに笑ふ色白の二十歳の孫が
お家で籠もる 尼崎市 小石 絹子

一人っ子一人遊びに馴染みおり見えない敵と
今日も戦う 仙台市 野々村 務

冷凍をしていたあんこを思い出しチンして秋
が始まりました 会津若松市 ともりゆめ

猛牛のごとき猛暑の力ぬけて秋なりわれの力
もぬける 流山市 塙 葉子

ひたすらに生きるとは雑事をこなすこと妻の
無言はそれを教える 盛岡市 内藤 賢一

譚星の一語のありて古本の汚れなきことさび
しくなりぬ 国立市 中村富士子

酒飲んで書いた手紙を感じて出すと言え
よ郵便ポスト 静岡市 柴田 和彦

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生 (希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

おことわり 次回は21日に掲載。6日の歌壇「ピアニストの腕なめらかにクロスして演奏という祈りの変異」は、類似の作品が過去にあるため入選を取り消します。



こちらから
投稿できます